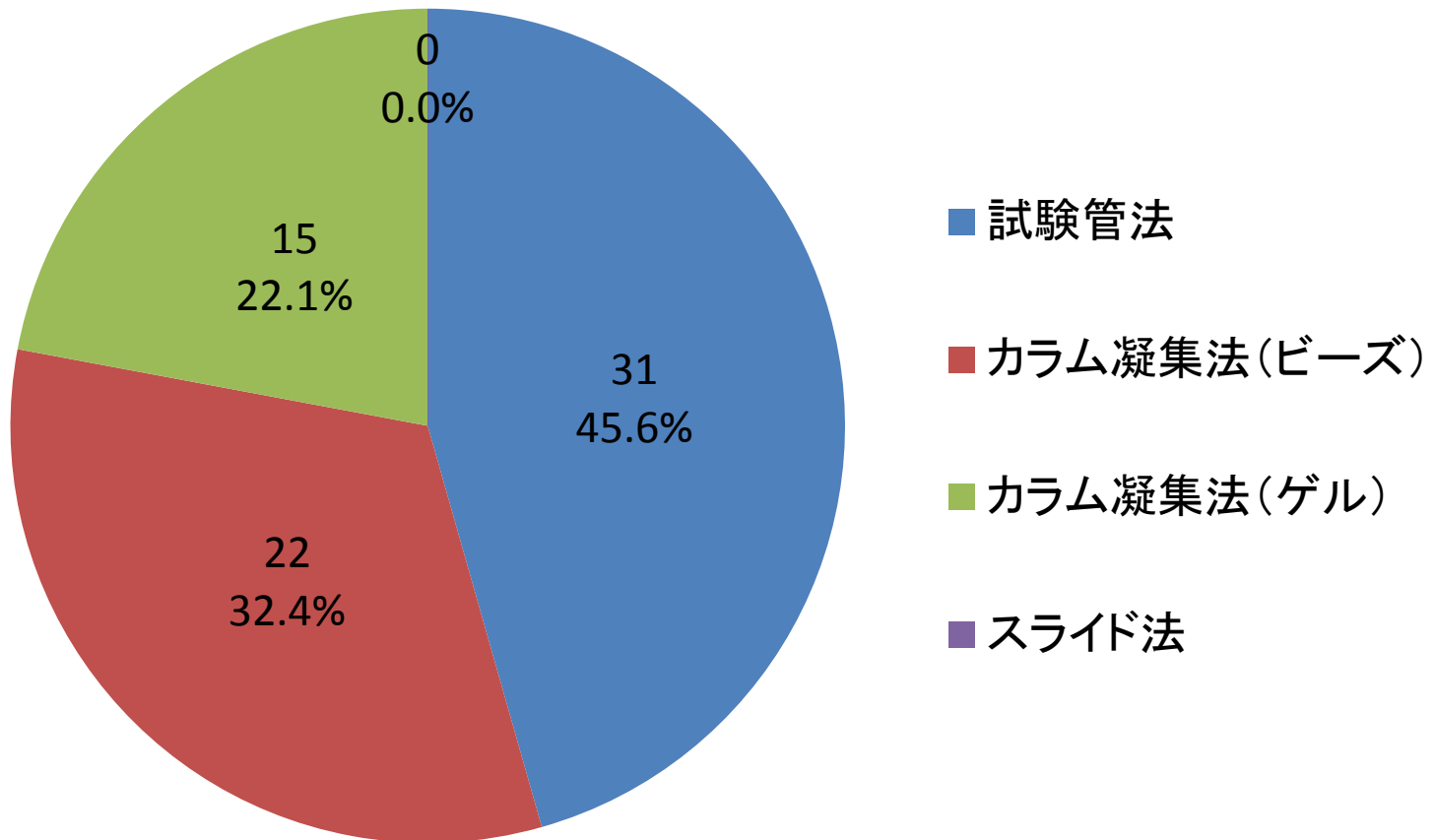


2019年度輸血精度管理 Rh血液型

静岡県立静岡がんセンター
梁瀬 博文

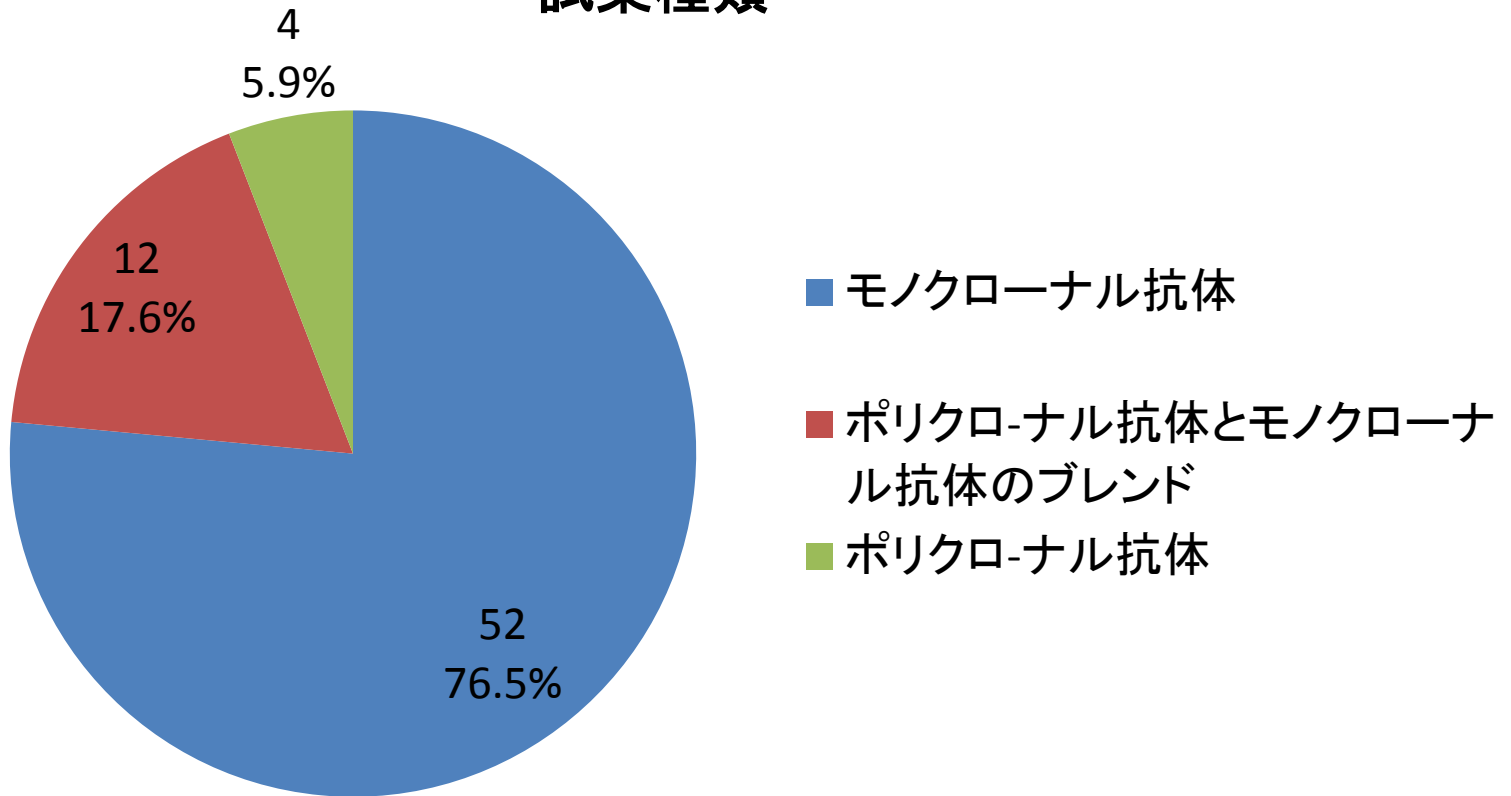
検査方法

施設数66

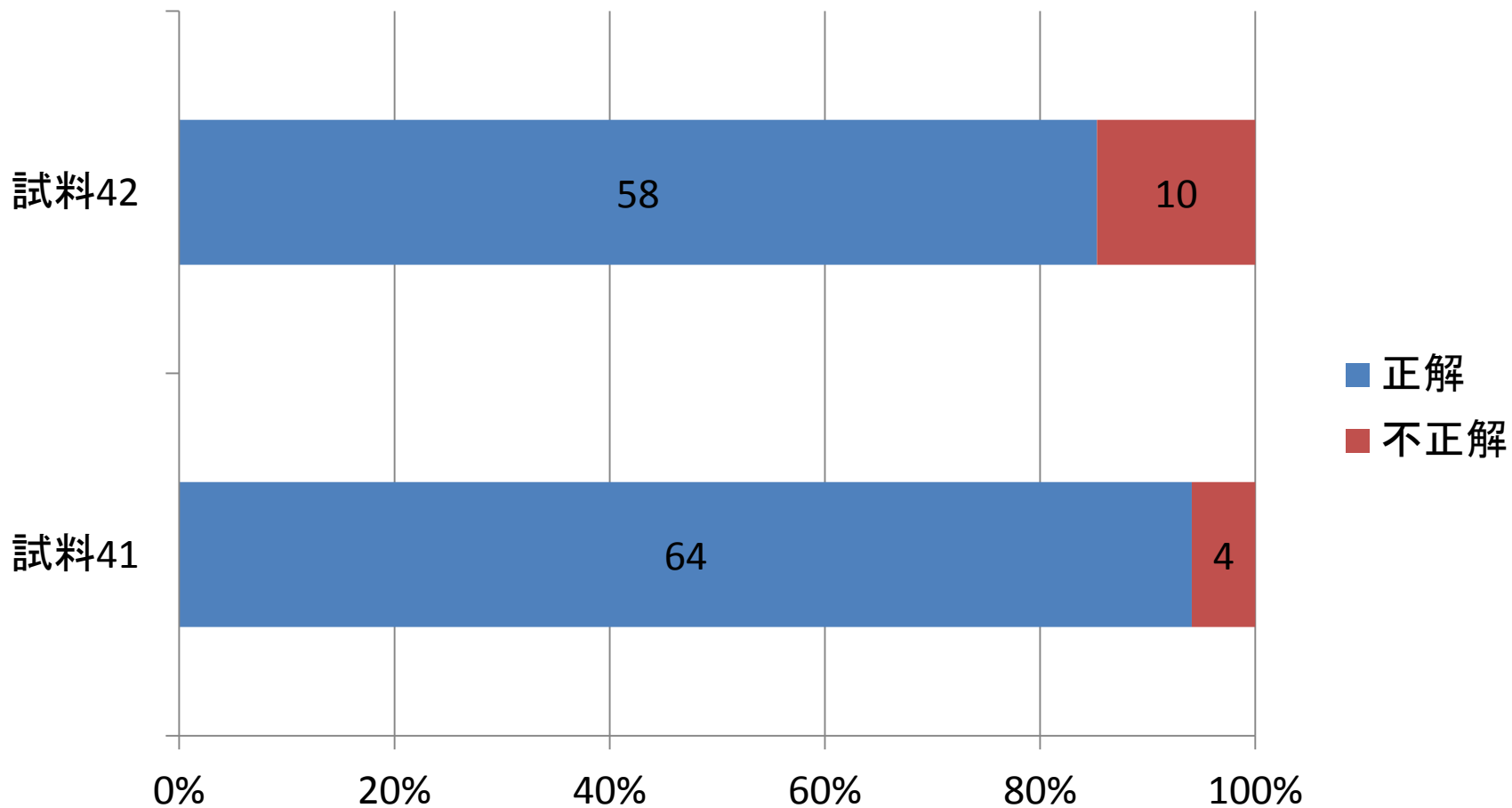


抗D試薬

試薬種類



試料41回答状況



試料41詳細

判定結果	施設数(%)
D陽性 Rhコントロール実施	64(94.1%)
D陽性 Rhコントロール未実施	4(5.9%)
合計	68(100%)

試料42詳細

判定結果	施設数(%)
D陰性 Rh-control、D陰性確認試験実施	54(79.4%)
D陰性疑い Rh-control実施、D陰性確認試験未実施	2(2.9%)
判定保留 Rh-control実施、D陰性確認試験未実施	2(2.9%)
D陰性 Rh-control未実施、D陰性確認試験実施	2(2.9%)
D陰性 Rh-control実施、D陰性確認試験未実施	1(1.5%)
D陰性 Rh-control、D陰性確認試験未実施	1(1.5%)
D陰性 Rh-control未実施、D陰性確認試験実施	1(1.5%)
D陰性確認試験Rh-controlのみ実施、本試験未実施	
D陰性 Rh-control未実施、D陰性確認試験実施	2(2.9%)
D陰性確認試験Rh-control陽性	
D陰性疑い Rh-control、D陰性確認試験未実施	1(1.5%)
判定保留 Rh-control、D陰性確認試験実施	1(1.5%)
weakD Rh-control、D陰性確認試験実施	1(1.5%)
D陰性確認試験(w+)	
合計	68(100%)

血液製剤の使用指針 第5版

IV 患者の血液型検査と不規則抗体スクリーニング検査

2. Rho(D)抗原の検査

抗D試薬を用いてRho(D)抗原の有無を検査をする。
この検査が陰性の患者の場合には、**抗原陰性として
取扱い**、D抗原確認試験は行わなくてもよい。

* あくまでも輸血の対応についてRhD陰性として取り扱う
という意味であり、血液型をRh(D)陰性として判定して
良いというものではない

**Rh(D)血液型の確定にはD抗原確認試験は必要であり、
検査を実施せず血液型をRh陰性と確定することは
誤りである。**

赤血球型検査ガイドライン 改訂2版

4.4.1.3

抗D試薬の直後判定が陰性の場合には判定保留とし、引き続きD陰性確認試験を行う。ただし、D陰性確認試験は必須ではなく、この患者はD陰性と同様に取扱い、輸血にはD陰性の輸血用血液を用いる

* 直後判定のみでは、陰性の場合には判定保留である。ただし、D陰性確認試験ができなくとも、輸血はD陰性と同様に扱うとしている。

赤血球型検査ガイドライン

4.4.1.1

Rhコントロールの直後判定が陰性であることを確認する

* ガイドラインにてRhD血液型検査において、コントロールの実施を求めている

まとめ

例年同じ指摘を繰り返しているが、医療法の改正により精度管理について今後の監査において重要視されていく。

正しい検査結果を提供することは、患者の医療の質に関わるものであり、我々技師の責任は大きい。検査の基準となるガイドライン、試薬の添付文書等を今一度確認し、それらから逸脱せず正しい検査結果を返すよう努めていただきたい。

今後改善されていくことを切に願う